

Streetwise

子供たちをよろしく

1984年7月の映画 カラー 92分 邦題：ユース・オブ・スティーヴンズ 原案：ジョージ・ロビンソン
監督：ジョン・ブアマン 音楽：トム・ウェイツ
製作：アンソニー・カウラー、ロニー・ワグラー、ネルソン

僕たちは誰にも愛されて、いない。

狂気と暴力の中に放り出されたストリートキッドたち



子供たちをよろしく Streetwise

1984年 アメリカ映画 カラー 92分

euro space



監督+撮影=マーティン・ベル/音楽=トム・ウェイツ/編集=ナンシー・ペイカー/録音=キース・デズモンド
 製作=アンジェリカ・T・サレー、コニー & ウィリー・ネルソン/製作進行=チェルリ・マッコール/写真撮影=メリー・エレン・マーク
 挿入歌=「子供たちをよろしく」「ラットのテーマ」作曲+歌:トム・ウェイツほか

●現代のハックルベリィ・フィンたち 川本三郎

かつて父親から逃げるようにして家出したハックルベリィ・フィンには、彼を優しく包みこむミシシピの豊かな自然があった。しかし現代の家出少年には彼らを保護してくれる母なる場所はあるのだろうか。

1983年、女性カメラマンのエレン・マークが、シアトルのバイク通りに自然発生的に集まるようになったアメリカの家出少年や少女たち、いわゆるランナウェイ・チルドレンの姿を撮影して「ライフ」誌に発表したとき、その写真は大きな反響を呼んだ。現代のハックルベリィ・フィンたちがあまりにも痛々しく見えたからだ。彼らを守ってくれる母なる大地はもうどこにもない。それどころか彼らは都市という現代の荒野のなかで、むきだしの暴力にさらされている。

反響の大きさを聞いたエレン・マークは、夫で映画監督のマーティン・ベル、「ライフ」の記者チェルリ・マッコールと3人で、シアトルのランナウェイ・チルドレンの姿をフィルムにおさめる企画をたてた。カントリー・アンド・ウェスタンの大御所ウィリー・ネルソンらが資金を援助した。そして出来上がったのが「子供たちをよろしく」である。

原題の「ストリートワイズ」とは、「町のことをよく知っている人間」という意味で、家出してバイク通りにたむろするようになった子供たちのことをさしている。彼らは大半が10代の子供たちで、映画には13歳から19歳までの9人のティーン・エイジャーが登場する。彼らはいわゆるブロークン・ファミリーの子供たちである。両親が離婚した、親に虐待された、母親の再婚相手に性的虐待(チャイルド・セックス・アブユーズ)を受けた——といったさまざまな原因で、家にどうしてもいられなくなって都会に出てきた子供たちである。

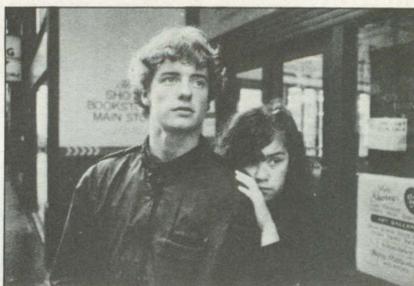
カメラはときに客観的なドキュメンタリーのように、ときに親密なドラマのように、子供たちに離れながら接近し、接近しながら離れる。

家を出て町に生きる——それはたしかに一面ではロマンチック

クな要素を持っている。ハックルベリィ・フィンからホーボー、ビート・ゼネレーションを経てヒッピーに至るまで、アメリカにはこれまでもそういう「自由」な子供たちがたくさんいた。しかし、そうした先行するランナウェイ・チルドレンに比べ、この映画のストリート・キッドたちはなんと弱々しく、無防備なのだろう。単に彼らの年齢が小さいからというだけではない。現代の都市にはもう「自由」という夢はほとんど生息が不可能だからだ。まだ子供のような少年が老人のようなシニカルな言葉を口にする。「僕は空を飛ぶのが好きだ。でもいくら空で自由でもいつかは地上に降りなければならぬことを知っている」。10代の少女が当り前のように売春する。そうしなければ生きていけないからだ。「自由」という言葉の裏にある肉体の痛ましきまでの酷使。彼らにはかつてビート・ゼネレーションやヒッピーが信じた「自由」の幻想すらない。

見捨てられた少年や少女たちは誰もが哀しいほどやせほそっている。ときには彼らは荒野を歩くキリストのようにも見える。彼らを見るわたしたちは現代ではもう二度と「自由」という言葉を使えなくなったことを知る。栄養失調でガリガリにやせた14歳のタイニーが、保護施設の扉のなかで突然、孤独に泣き出す姿の痛ましきにはもうほとんど言葉を失ってしまう。

映画はしかしこの哀しい現実を性急に告発したりはしない。社会正義を持ち出すこともしなければヒューマンズムをひけらかすこともしない。映画に出来ることはただ静かに現実を見つめることだけだ。そしてさらに出来ることがあるとすればそれはいまやどこにいるのかも定かでない「神」に「彼らが安らかに生きられるように」と祈ることだけだ。最後に流れるトム・ウェイツの「子供たちをよろしく」が圧倒的に悲しいのはそれが一つの「祈り」になっているからだ。子供たちをよろしく……エレン・マークやマーティン・ベルの心のなかにあった言葉は、たとえば、J.D.サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」のあの「僕はライ麦畑で遊ぶ子供たちが崖から落ちないように見張っている捕まえ手になりたい」だったかもしれない。



11月22日(土)より公開!

ユーロスペース tel. 461-0211

渋谷駅東急プラザ口下車2分 東急観光うしろ

開映=入替制(12月31日-1月3日休館)

月-金	1:00	3:00	5:00	7:00
土・日・祝	12:00	2:00	4:00	6:00

料金=当日 一般1500円 学生1300円

前売1200円(都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケット・セゾン)

